

# ピアサポーター 楠永洋介インタビュー

## 取材者まえがき

今回のインタビュー記事に関して補足しておきたい事がありますので、この場をお借りします。よろしくお願い致します。

僕はインタビュー経験はもちろん、その形式や決まりごとを全く解らずに始めていますので読みにくいかもしれませんが、僕なりに話し手さんの言葉を解釈せずにそのまま文章にしているつもりです。それが僕のインタビューに対する今の基本姿勢です。

僕はインタビューをしましたけれど、自分の声はいらないと思い、本文には自分の質問などは一切掲載しておりませんので、自然と楠永さんの独白スタイルとなっております。しかしながら、今回の取材で僕が長い付き合い(ブランクあり)である楠永さんの謎に迫れているという事が面白かったのですが、それは楠永さんご本人を描き出すのとはまた別事だと思っております。

そしてこの独白スタイルの中に出てくる「みんな・人」という曖昧な主語は、楠永さんの身近な人や家族会で楠永さんが出会ってきた当事者や親御さん達のことです。ごく個人に限られていない共通した事柄を話されているので、こういう大きな主語にならざるを得ません。

今回のインタビューで話し手の楠永さんと、完成前の原稿について話し合いました。そこで感想やアドバイスを頂いて解ったのは、僕のメモがほとんどそのまま文章になっているということや、僕が楠永さんと長い付き合いだから解ることも、楠永さんご本人をあまり知らない、あるいは全く知らない方が読まれると、旨味や脂身が強いおかずばかりのお弁当の様に食べる人を選ぶ文章になっているということ。それなので、せめてその濃い味が混ざらない様、お弁当の仕切りとして目次を設けてあります。(※このお弁当の比喻や目次のアイディアも楠永さんから頂いたものです。)

僕の力量不足で流れる様に一連性のある分かりやすい文章とは程遠いですが、どうぞお付き合いお願い致します。

楠永さん、お忙しい中ご協力有難うございました。

2020年8月20日 石川佑太

## ひきこもりピアサポーター会員 楠永洋介(34) インタビュー記事

「私が見ているお化けの話」 取材者：石川佑太

### ・私の違和感

自分の違和感は小学校1年生の時に、先生の質問を先回りして発言した時に生じた変な空気だった。隣の席の子は暴力的なコミュニケーションを取ってくる。

その違和感を抱えながら登校していた時期、母方の祖母がくも膜下出血で倒れた。母は祖母への介護に回り「無理は言えない」という気遣いがあった。母の祖母に対する介護は続いたが、祖母が亡くなり49日を過ぎてから「学校に行きません」宣言を伝える。兄は頑張っ

て登校していた。世間体を重んじそれを背負う。母は鬱状態になっていた。外にあるはずの世間体という同調圧力は自分を含め家族を苦しめた。実態のない気配は家に上がり込み、「お前は家に居てはダメだ、お前は居てはいけないのだ」という漠然としたメッセージで確かな不安と恐怖をもたらした。それがついに自分の命にまで切迫する中、「ギリギリの所で力を抜いたら上手くいく」という諦めに近い感覚を獲得した。

今思うと、今を生きている人の多くが「我慢(≒努力)することにより利得が得られる」というストーリーを抱えていると感じる。そして、みんながそういうものを強化している時期だった。

### ・「無理や・・・」という100%感覚の話と「波の感覚」

認識であれば話して理解してもらえるはず。「どうやっても抗えないものがある」という認識していない言葉の嘘。そこにはただ「抗えない状態がある」というその「状態」が重要なのであって、それが「無理や・・・」という感覚の話。今から見ればそうであったという状態であり、ただの感覚。

具体的には、海面に上がろうとするも波に阻まれるタイミングがあるとする。しかし、波が来る時に海面に出て息を吸うと海水を吸い込み溺れ死んでしまうだろう。であれば、次のタイミングを狙う、それを伺う。そういう自分の環境を含めた感覚で、お化けの存在を他者に提示するほどに難しいこと。そして今はそのような波に揉まれることで上手くいったという認識がある。たまに人に会うと「こういうお化けっているよね」という事が通じる人が居るので嬉しい。

## ・自分の環境の話

自分がひきこもっていた事については、学校や部活などで「我慢すれば……」という事はしなかったので、「我慢で利得が得られる」という幻想は抱かずに済んだ。母が鬱から復帰した頃、「学校へ行ってみようか……」と思い登校し始める。

小学校は3年生から4年生まで行かなかった。「先輩・後輩システム」が面倒なため、市立の中学は3年生から参加する(その中学生ごろに書籍「ブツダとシッタカブツタ」に出会う)。定時制の高校も卒業するが、家にいる時に死後分けてもらった祖父の遺産を全て使い切りお金が無くなったので、働きだして今に至る。

## ・これまでのしんどさ

その大部分は人からもたらされている。ある程度整理出来ればしんどさを与えられた人間にもしんどさがあったのだと思う。その人が悪いとは思わないし、自分の視点からだと悪役になってしまうその人も大切なのだ。しかしこれは人には伝わらないだろうとも思う。

何となく表現すれば、それ自体は「ピンク色の像がいるんです」と言うも「はぁ……」か「いるよね」のどちらかであった。後者は片手で数えられる程しかいなかったが、解らないなりに解ろうとしてくれる人も、「解らない！」とはっきりと言ってくれる人も含めて有難い。

## ・共依存と言うのかはハッキリしないが……

人間は自分にとって得のある人は利だし悪いことをする人を悪と見なしがちだが、そのような利他的見方ではしんどいだけでその瞬間良い悪いを決めるのはしんどい。

そのような波が悪いとかそういうことではなく、ただそれはあるだけで即ち悪とは言えない。「波の感覚」の話は人に対してもこれを採用している自分の感覚である。そしてこれこそが、根底的に自分が人とは全く違うという事なのだ。

## ・昔やり込んだゲームの好きなセリフ

「私は常に勝ち、誰にも負けず、なおかつ私の前に誰も負ける者はなく、全てが勝利する。それが本当の勝利だ。私が描き出すのは常に、100%の勝利だ。お前はただ50%の勝利をむしり取ろうとしているに過ぎない。それでは永遠に本当の勝利を得ることはできない。」

こういう話が他者には伝わらないだろう。あれのことを言っているのだろう、とういうことは解る。そして今はそれを言語化できるけれど、それがいつからあるのかは不明である。

みんなは自分の悪しき部分を見過ぎていたり、何かを悪としてそれに勝つ事に腐心している。自分のことも「良いもの、悪いもの」として見ているのなら問題は一生終わらない。そして、自分はそのことに関して頭だけで解りたくない。

### ・確たる自分

みんな確たる自分が欲しいのだろうと思う。自分もそういうものがあるが、何かが決定的に違い、それは「波の感覚」である。磯で岩の下の魚を獲ろうとする時にも波はずっと動いていて、周りの波の動きを感じながら自分が動く時、それが気持ち良かったというのが原体験としてある。あれはいいものだという揺らがないものがある。みんなは「それっていいものなんですね！」というところから始めなくてはならない。

人は今ある自分を足蹴にしてそこに行こうとする。でもそこに行く事が重要ではなく、「心地いいな」という時に動き易くなるのはその環境に「そうだ、それだ！」と褒めてもらっている状態があるのだ。自分はそれをそのまま受け止めているので、そういう流れを体験したという経験があると確信している。みんな、足場を必要とした考えを欲する。「確たるもの、下積み、毎日ちょっとずつ」。自分はそれに対して全く共感できない。

### ・近況から

ある武術の稽古会でその先生に伝えられたことがある。

「キレイに動いたら寂しいんだよ。あまりにも努力とか我慢に慣れ過ぎてしまい、体のノイズを感じていない。ノイズを消して動ければ誰かとぶつからなくて済む」。

今まで身に付けてきた常識で考え動くことの不自由さ。それで解決しようとしても現状打破は無理を繰り返す。出来ると思って出来ない自分、出来ないと思って出来る自分。その両者の間から生じる自分が「有る」ことを自分は経験している。解った上でやりたい自分がそれをすごく邪魔することも経験している。そしてその認知出来ない領域を解ろうとする瞬間、解らなくなることも。

## 取材者あとがき

僕が楠永さんと出会って今年で丸8年になりますが、僕の印象では同じ言語を用いて話してはいるものの、文脈のズレを実感できる方でした。抽象的な会話のときに、そこで僕自身も楽しんだ覚えはありますが、どうも楠永さんは僕とは違う方向を観て話されている。あるいは全く違う立脚点がある。それは、シンプルに視点が全く違うということ。

今回のインタビューでは、そのズレの正体に迫る事が出来たので僕自身にとって、とても意義深いものとなりました。そして僕が彼の真似をすると痛い目を見るのだということも解ります。それはどこかを抜き取った型ではなく、彼自身の連綿としたセンスなのです。

それを今回のインタビューで言葉として頂戴しましたが、その言葉だけの二次元的な平面で受け取っただけで、このインタビューではその奥行きを明らかにするものではありません。

今回僕が解ったのはその香りを嗅いで明らかに僕と彼が「違う」ということ。当たり前なのですが、わざわざ書くのはその実感としての強さです。そして実感として強いという言葉の嘘で、そこにあるのは「解らない」という茫漠さが僕の中に横たわるということ。でもそれは虚しいものではなく不思議な充実です。それは言葉には出来ませんが、強いて表すならば、解らない事が解った結果の充実。

解ろうとする事を手放すのではなく、解ったつもりになる呪いから逃れられるわけでもなく、理解の届かない宙ぶらりんの空間が存在している事の認知を希望として人と接する事が誠実なのかと思っています。

今回の僕の稚拙なインタビュー記事にお付き合い頂き有難うございました。

重ね重ねですが、ご協力いただいた楠永さんに感謝いたします。有難うございました。

2020年 8月 25日 石川佑太